学校博物館が、地域を、人を築く

1 はじめに

先日、このような記事を見た。
子どものころずっと遊んでいたグラウンドに「お年寄りや体の弱っている方々は、金あみに野球やサッカーボールの当たる音が大変苦痛に感じます。これらの球技は絶対やめてください。人の痛みのわかる人になりましょう。」という看板がグラウンドの金あみに大きく貼られていて、そこには子ども誰一人いない。
近年実に住みづらい社会になってきていると痛感した。社会的弱者にとって安全・快適かもしれないが、彼らにとってそれは楽しいだろうか。むしろ高齢者や地域住民からしたら、近所の公園で子供たちが元気よく遊んでいる風景の方が好むはずなのではないのか。

最近の都市ではコンパクトシティやスマートシティなどがトレンドとなり、機能面の充実化を図る一方、このように子供が公園で球技をしてはいけないなど、行動・生活を一方的に制限される規則やルールが設けられ、窮屈で寂しい都市と化しているという一面がある。都市の利便性を高めるために、多くのものを犠牲にしているという側面を考え直す必要があり、どのように機能面を担保しながら、寛容で楽しい都市にしていくかということも考えなくてはならない。

そのような中、近年では地域開放という面で小学校施設の利用が重要視されてきており、小学校施設が地域活動の拠点となりうることや、小学校の余裕教室の活用の方法にも関心が高まっている。特に、少子高齢化や地域定住、地域存続の視点からは需要が高まっていると言える。そこで本稿では、子供と高齢者を改めて考え、両者の共存の仕方として、小学校の余裕教室を活用した学校博物館の活動を紹介することと、学校博物館のあらゆる側面での可能性を述べることで、少子高齢化社会、地方都市の過疎化、地域間の関係性の希薄化などという現状の課題に新たな光を射し与え、窮屈で寂しい今の都市のイメージを払拭し寛容で楽しい都市像を提言する。

2 学校博物館について

学校博物館とは、学校の余裕教室または学校施設の中及びその周辺の空地等を活用して、博物館活動を行う拠点のことである。学校内歴史資料室・郷土資料室だけではなく、ビオトープはもちろん水族館や美術館がある学校も存在する。近年では、少子化のため児童数の減少や小学校の統廃合の為余裕教室が全国的に増加傾向にあり、余裕教室の活用

について関心が高まっている。横浜市では、横浜市歴史博物館の博物館デビュー支援事業という活動が先駆的に行われており、横浜市の小学校の未だ整備されていない学校内資料室を博物館がサポートすることによって整備し、学校博物館として活動させる事業が盛んに取り組まれている。
しかし、学校博物館というのは、作りたいという強い熱意と行動力があればそこまで時間がかからずできてしまうという利点の反面、完成後後の維持・継続面が問題で、作る側の熱量のピークは完成時が一番高く、それ以降は下がる一方であるのが現状である。よってつくったのは良いものの、結局は使われなくなってしまうということがよくある。その中で、横浜市金沢区にある大道小学校の学校博物館に至っては、学校博物館として整備された後も、独自に工夫を凝らし、学校博物館が街の中心的な位置に存在している。よって、本稿では、大道小学校の学校博物館を対象に、学校博物館の成立している条件を模索し、なぜ小学校に博物館があることが良いのか、そして学校博物館が地域にもたらすメリットを述べるともに、学校博物館を通して私が暮らしたい未来の都市像を提言したい。

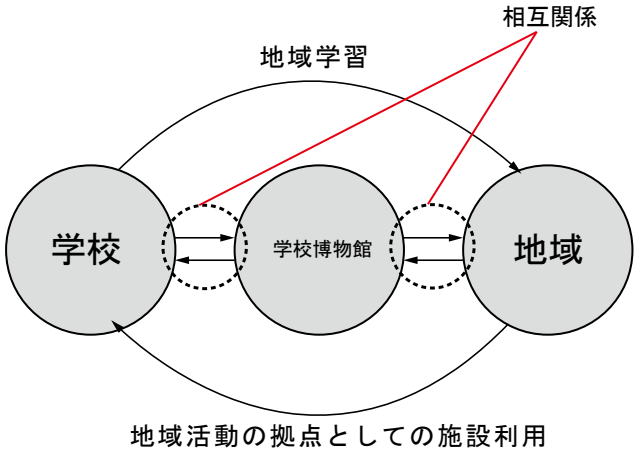
3 横浜市立大道小学校学校博物館「ふれあいむかし資料室」について

横浜市金沢区にある大道小学校では平成 5 年の創立 50 周年を記念した事業の一環として、歴史資料室を開設。児童数が急増したため大規模校であった大道小学校を 2 つに分離させ、大道小と六浦小に分けたとこによって生まれた空き教室を活用したものである。今はきれいに整備されている資料室だが、元々は多くの資料が雑多に置かれているだけの物置状態であったが、横浜市歴史博物館の支援のもと、展示室として機能するように整備された。展示品としては江戸時代の古文書や農機具、農業、漁業、生活道具などの地域の様子を伝えるようなものがある。

こちらの学校博物館では月 2 回ほどの一般公開日を設け地域住民を呼び込むことや、学校博物館を拠点とした地域行事を年に約 10 回ほど行い毎年恒例の地域活動となっている他、小学生の授業で使われることはもちろん、近隣の小学校に資料を貸し出して授業を行うといった、子供の教育の場としても活用され、その活動の幅は非常に広い。またこの学校博物館は地域住民によって立ち上げた実行委員会によって運営され、行事の際には多くの地域住民が運営側にまわり手伝ってくださる。さらに多くの地域住民や子供が参加してくれるため、毎回の行事はほとんど成功に終わるそう。

このように大道小学校の学校博物館を中心に地域での関わりが深まっており、地域と学校が学校博物館によってうまく結ばれていると感じる。しかし、どこの小学校でも学校博物館があるからといって地域や学校との良好な関係が築くことができるとは限らない。大道小学校で比較的成功している理由として私が考えるのは、「小学校側の許容度が

高い」ということを挙げる。小学校というのは地域のシンボル的な存在で、かつては交流センターの役割を果たし、地域のだれもが出入りできる環境であった。しかし昨今は安全面や防犯面などの社会的風潮により地域に対して閉じている傾向にあるのが現状で、そのような中で学校開放・地域開放の場としての小学校というキーワードが出てきている。しかし学校開放というものは、聞こえは良いものの、実際は地域に対して学校の施設や機能を開放し、それを地域が利用するという一方向のベクトルの学校開放であるということ。学校博物館でも同じようなことが言える。学校側が地域に対して余裕教室という空間（施設）だけを貸し与え、それを地域が学校博物館として運用し利用する。学校博物館が実際には地域の活動拠点になりうる可能性は持っているのに、その可能性を引き出せずにいるのは、学校側との連携がうまく取れていないためである。では、大道小学校の場合の学校側の許容度が高いということはどういうことなのか。



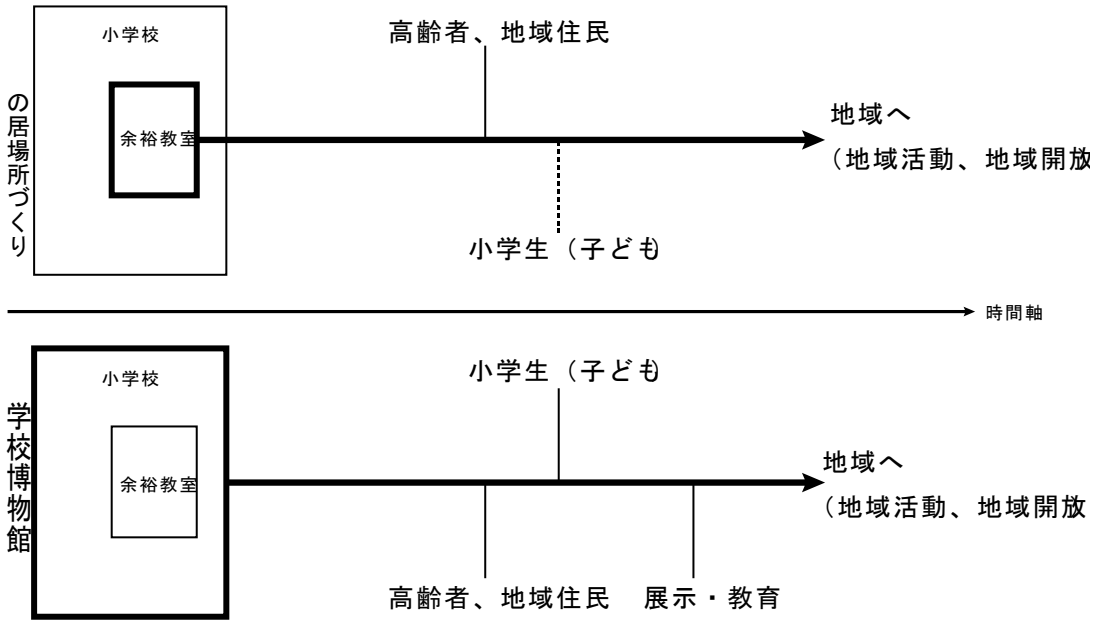
本質的な学校開放というのは、先ほども述べた地域住民側が施設を一方的に利用するという一方方向のベクトルではなく、学校と地域間の相互交流であり、そのためには学校側が地域にアプローチするという逆方向のベクトルの存在が必要である。上図では学校側が地域学習として地域にアプローチし、地域側は地域活動の拠点として施設を利用する。そして学校博物館の立ち位置としては、学校とも地域とも相互に関係し合う位置、例えば

【学校→学校博物館】は、学校教員の協力、
【学校←学校博物館】は、児童への教育の場の提供であり、
【学校博物館→地域】は、地域活動の場の提供
【学校博物館←地域】は、展示物、地域の協力者、知識

である。大道小学校の学校博物館ではこの関係性の図がうまく当てはまっているが、このように考えると、やはり学校博物館単体だけで考えては地域全体の活動として成り立たないように思える。小学校の許容度というのは、小学校側がいかに学校博物館としての活動を理解して協力してくれるかということで、より学校博物館としての活動がうまくいくだろう。

4 小学校に博物館があるということ

歴史のある小学校には、ほとんどの場合歴史資料（民具や古文書、考古遺物）がある。多くの場合、そのような歴史資料は小学校の既存の社会科教具室などではとても収納しきれいないケースが多い。さらに地域の意向もあり、余裕教室などに「学校博物館」として開設することがほとんどである。一方で余裕教室の活用法として高齢者の居場所づくりがあるが、これは地域活動の拠点としての視点が強く、学校側というより地域側が主体となって活動している。「高齢者の居場所づくり」と「学校博物館」の両者に共通している点は学校施設を活動団体の拠点としている点であるが、学校博物館には、展示活動を通して小学校と地域間の関係性を深めているという点があり、余裕教室を活用するという目的は同じであるが、その効果が異なる。



上図は活動自体の形態と、どのような過程を踏まえて地域活動へ向かっていくかのイメージ図である。高齢者の居場所づくりとして余裕教室を活用する場合は、最初から余裕教室単体での活動であるため、活動自体地域に向かってはいるが、小学校が参入してこないため、地域活動に子供が参入する可能性が少ないことを示している。

一方、学校博物館では、“小学校の中の”余裕教室とみていることから、小学校全体が地域に向かっている。これは前章でも述べたことと結びつき、小学校全体ということは、もちろん子供の参入が地域へ向かうベクトル線上に乗る可能性が高まる。さらに展示活動もあるため、地域学習の面でも、地域を知る、地域に愛着を持つなどの点にも有効かと思われる。

小学校に博物館がある最大の利点として、地域の子供を巻き込むことができることだと考える。学校博物館は地域の拠点ともなるが地域の子供を育てる大きな役割を担っているといえるのではないだろうか。

5 学校博物館が、地域を、人を築く都市

以上、横浜市の大道小学校の学校博物館を例に、学校博物館が地域と学校をいかにして繋ぎ、小学校に博物館があることの意義を述べてきたが、最後に私が考える、学校博物館が作り出す都市像を提言したい。

まず、前章でも述べた通り、学校博物館は余裕教室を有効的に活用し、それを小学校の教育にも行かせること、そして地域の活動拠点ともなりうるということから、学校博物館を通して、地域と小学校が親密にかかわることが可能になり、その過程で地域間での関係性が密な都市が出来上がるのではないだろうか。その地域では年齢関係なく地域の話を教え合ったりし、地域に対する愛着が自然に形成されるのではないかと思う。

そして何より、この地域で育った子供が、大人になったときにもう一度戻って地域活動に参加するのではないかと思う。そして次の世代の子供に、自分が教わったように教える。そのようなサイクルが生まれるのではないだろうか。

本稿はじめにも述べたが、最近の都市は、機能とシステムを重視する一方、人と人といった人間同士の本質の部分が欠けているのではないか。この学校博物館には、機能面を担保しつつ、人間味のあふれる都市を形成してくれる可能性を秘めているのではないだろうか。そして、住民に地域の帰属意識を高めさせ、地域定住や地域存続という現状の課題に手を射し伸ばしてくれるだろう。